

都市文化としての 芸能

鳥越文蔵 (早稲田大学名誉教授)
住所 志木市柏町5-18-31

1

私が奉職していた早稲田大学にはエクステンションと称する生涯教育の機関がある。古風な用語なので、最近オープンカレッジとも称しているが、大学版カルチャーセンターである。この古風な名称は大学の創立者大隈重信の命名なので、軽々しく扱うことができないのである。

ここの講座は今や八百に垂んとするほどで、受講生も二万人を超している。私自身、専門の歌舞伎も担当しているのであるが、専門からやや離れた講座に誘いがかかることもある。例えば「坪内逍遙」など。今回も「機械時代の都市の死と知のネットワークとしての都市の発生」という長い題目の講座に一回出講した。その時の題目が表記の「都市文化としての 芸能」である。このことについて報告する。

全体の企画立案を担当したのは、都市安全学を専門とする理工系出身の岩崎敬氏であり、講師は岩崎氏の他は情報文明論の公文俊平氏、免疫学の多田富雄氏、科学哲学の村上陽一郎氏と私の五人であった。各氏の演目も挙げておこう。岩崎「機械時代の都市と知恵時代の都市」、公文「ネットワークとしての社会」、多田「生命の死と都市の死」、村上「学ぶ場としての都市」。話の内容に逐一触れることは出来ないが、立案者の意図した一点は「都市の死」であったと思う。彼のレヂュメの一部を引用してみよう。

近代以降の都市、特に我が国の都市は生産機械としての効率とスケールの拡大といった、巨大化の道を歩んできた。これを機械化時代の都市と呼ぶ。(中略)一方、情報化時代となって、都市は知恵のネットワークの要とし

て位置づけられようとしている。これを知恵時代の都市と呼ぶ。知恵の時代となって、これまでの都市はどのような形ないしは振る舞いであれば存続できるのか。ないしは、死を迎えるのだろうか。

2

今回の私以外の講師の方々は、現代に立脚して、これからの都市へ向かっていられるのに対し、近世芸能を専門分野とする私はむしろ現代まで引きずってきた近世的なものへという後ろ向きの姿勢であった。よって、「都市」を考えると、近世において三ヶ津と称した京・江戸・大坂、それに名古屋を加えた四大都市を直ちに思い浮かべる。さらに、わが国は伝統芸能として、七世紀末から八世紀初頭に移入された舞楽が宮中を中心に伝承されており、かかる移入芸能が土着化(日本化)した能及び狂言が、これも政権を握った者の居住地(首都)の京都を中心に勃興したという歴史がある。近世芸能と位置付けられている歌舞伎も同様に京都で起っている。程なく首都たる江戸にも移され、百年を経ると京都の歌舞伎と江戸の歌舞伎が並立するほどの力をつけ、その後は文化現象全般がじわじわと江戸に傾いたように、歌舞伎も江戸が中心になったといえる。人形浄瑠璃(文楽)だけが首都にこだわらなくてもよいが、三ヶ津とくに大坂がこの芸能を育てた都市であった。

一方「芸能」となると、大和朝廷以来の神事・祭祀に附随した芸能が、都市に限らず農山漁村においても行なわれている。いわゆる民俗芸能と呼ばれるものも視野に収めねばならない。村落芸能から都市芸能への視点の移行は、祭祀から興行へと

いう方向を導入することであろう。その興行も勧進興行を起点として都市の劇場興行へと行き着くことになる。この推移については小笠原恭子著『都市と劇場』などに論考がある。都市には何故芸能を必要とするのかなど、文化現象としての芸能を説き出すと、一回の講座ではまとまらないので今回この点には切り込まなかった。

3

劇場における芸能は祭祀芸能が場所と時間、とくに時間に制限されていたことから解放され、ある程度観客に選択の自由が与えられることになったが、それに伴い情報を獲得する労を要するようになった。

例えば、江戸に住んでいた大名柳沢信鴻(米翁)は大の芝居好きで、彼の『宴遊日記』には江戸三座(中村・市村・森田座)のことが克明に記録されている。その米翁にして、ある時芝居見物に出掛けると開場していなかったという。情報獲得不足と言わざるをえない。

現代に引き付けて言うと、東京の国立劇場で歌舞伎を公演すると、歌舞伎座と同様に二十五日間興行であるが、歌舞伎座が毎日昼夜二部興行であるのに対し、国立劇場は一部興行である。しかも昼だけの日夜だけの日と曜日によって異なる興行法なので、そのことを把握していないと米翁同様無駄足を踏むことになる。

幕末の嘉永二年(1849)から明治四十一年(1908)まで毎日よくも書いたと感心する日記がある。明治期の能楽復興に貢献した梅若實の日記であるが、彼も芝居好きであったように見受けられる。最晩年で、本業には後継者も育ったということもあろうが、明治三十五年の一年間には四十六回芝居に行っている。二つの例を引く。

(1)七月九日 常盤座水野一座再度見物。云々。(この芝居は四日に一度行っているの
で再度である。)

(2)十月 九日 中洲の眞砂座へ久々ニテ見物(中略)九時二始り夜八時閉場、九時帰

宅。(二日に宮戸座を見ているので、久々とは眞砂座へのこと。)

現代でも劇評家あるいはオッカケを自認している人ならこのような観劇法もあるが、一般の観客にはほど遠い経験としか言いようがない。

民俗芸能の調査で徹夜が珍らしくないことを知っている筆者にしても、上演時間の問題は気になる。都市の人口が増加し、住居が都心の劇場から遠くなったことが大きな要因であろうが、今都会の劇場は出来るだけ終演を早めようとしていることも、事実として記録しておかねばなるまい。

4

わが国の地方都市における演劇活動状況を把握するために演劇博物館では劇団と名乗って活動しているところからは情報を集めている。その中には言葉は悪いが泡沫劇団と思ぼしきものもあり、情報収集願に無回答ゆえに新しい名簿から消えざるをえない劇団もある。この名簿を見る限り、大都市が劇団を育成していることが瞭然であるが、中でも東京に集中していると言えるほど数の開きがある。

地方において歌舞伎を伝承しているものを地芝居と総称する。最近は毎年地芝居サミットも開催されている。そのことなどが刺激となったのであろうか、長らく絶えていた芝居が復活したという土地もある。ある意味では復興の兆しと読みとってよいのかもしれない。数年前雨が降らず水飢饉が叫ばれたことがあった。とくに四国地方が厳しかった。その時四国の各地で雨乞いの祭が行なわれた。何十年ぶりという土地も少くはなかった。雨乞いの芸能がこれほど多く、しかも忘れられずに伝えられていたのは驚きであった。地芝居も何かの動機があれば復活する潜在能力は有しているのであろう

盆の祭を継承させたいために、田畑の作業形体の改革に努力しているという農村が九州にあることも知っている。この土地は今のところ芸能研究者より先農地改革関係者に注目を集めているとら、農地改革によって芸能復興がなされるとすれば、われわれ芸能研究に携わる者ももっと関心を示さね

ばなるまい。

劇団活動が東京に片寄っていることは先述したが、活動拠点を地方へ移した例も皆無ではない。鈴木忠志の富山県利賀村をはじめ、仲代達矢の能登など、幾つか挙げる事が出来る。東京への集中化から多極化(分散化)の方向へ進むのか否か、まだ結論付けるのは早過るのであろう。

5

都市、人口が増加すればするほど大消費地になるのは自明のことである。江戸は近世期世界最大の人口を抱えた都市であれば同時に大消費地であった。それゆえに世界にも稀な豊かな庶民文化を育てたと言われている。生産と消費の観点で芸能(演劇)を考えると、未分化という問題に行き着く。具体的に言えば、劇作家・演出家・俳優・観客など演劇を構成する役割の人は、それぞれ独立していると同時に協働しなければ成立しないという特殊事情の上に演劇は成立しているということである。数人の役者に直に聞いたことがあることは、客がいいところも乗ってしまうということ。逆に、招待客貸切りの舞台ゆえに熱の入らない投げやりな演技を見せられたことも経験している。

ともあれ、以上のような都市と芸能の関係についてあれこれ問題を提出するという形で六十分の話を終えたのであるが、結論に近いことを言えば「都市の死」に対しての私の回答は次のようなことである。

これまで述べてきたように、私の都市観は強いて言えば京都中心である。ただ私も長らく関東に住んでいるので身近かな例としては東京を引き合いに出すことになる。この講座が東京において開講され、講師も関東圏の人であったということも理由の一つであるが、都市=東京と限定されての展開になったことは否めないようである。とすれば、大小劇団の芝居で年間三百六十五本以上の作品に接することも可能な東京は、芸能の面では死んではいない、生きている都市と言わざるをえないと、私は結論付けた。

6

ここ数年私は佐渡島に深く関わるようになった。一年に数度通う。説経・のろま・文弥の各人形の調査は数十年前からのことであり、如何に伝承されているか関心はあった。今でも文弥人形は三十座近くある。さらに能舞台がやはり三十近く残っていることも知った。佐渡は都会ではない。それ故特殊例として佐渡を考えねばならぬという提言をして終った。

この講座は講師の一方的な話で終るものではなかった。三十分以上の質疑応答の時間が設定されていて、活発な発言があった。それだけでなく、事前事後の情報をインターネットによって公開するという新しい試みがなされたので、一定期間アクセスが出来るし、一層充実成長させようというのが立案者の目論見でもある。関心のある方は岩崎敬氏へアクセスして下されば受講者間に飛び交った意見も含めて入手できるものと思う。

(<http://mr.rcast.u-tokyo.ac.jp/>)

事前に私宛に来た質問とはどんなものであったのか、例示しておく。

- (1)ヨーロッパ近世のロンドンやパリでの、芸術や芸能の発達はどのような特徴があって、それらをどのように評価されますか？
- (2)それにたいする、為政者の介入は存在していましたか、またどのような形でしたか？
- (3)江戸の芸能は、かなり幕府の管理を受けていたように感じますが、それは芸能の発達や庶民生活にどのように影響したと思われますか？
- (4)芸術とは、社会を身体的に感じ取り、批判し、包括的に表現するものと言われるそうですが、近世の江戸ではどのように位置付けられていたのでしょうか？
- (5)多田先生の言われる、非日常的な世界へのトリップが都市生活のストレスをいやすとすれば、大衆芸能の盛んな江戸は社会的な課題も多かったと推測されますか？
- (6)江戸と東京とは災害や社会不安と共に増加

する人口、巨大な消費都市、大衆的な芸能の発達など、共通するところが多いように感じます。江戸から東京へのつながりを作るものは何でしょうか？

(7)文化的側面から見て、現代の市民と江戸時代の町人との大きな違いはありますか、それはどのようなものですか？大衆の思考、文化的曖昧さなど？

などなど。これらの質問に対する回答は用意していたのであるが、全てに答えるには時間が不足した。一つには当日出された質問を優先したことによる。このへんの整理をして進める必要を感じている。教室を離れての講義が今後多くなるのであろう。その試みに参加したことを有意義に思っている。

最後に。私自身はコンピューターを手掛けないので、アクセスについてのところは時間経過とともに消えているのかもしれないことをお断りしておく。